

# インデイステイメント+Q

第5話 自分でやるから

庫発りべるき

## 〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

## 〈本編開始〉

どこにでもある住宅街。

静かな夜——のはずだったが、何かおかしい。

「てめえが悪いんだろう！ああ！」

小さな道路で男が怒鳴りつけている。年齢は五十代前半と思われる。

「それはあんたの言いがかりだ！」

もう一人の男が怒鳴り返す。二十代後半である。

その近くでは——六十代前半のある夫婦が戸惑いながら騒動の様子を見ている。

どうしてよいか、わからぬままに——

その後——

怒鳴りつけた男が夫婦に迫ろうとしている。

「よせ！」

二十代の男性は止めようとする。

そして、それを振りほどこうとする男。

「どけよ、ゴラァ」

自分の両親である夫婦を守ろうと男に駆け寄る。  
だが——

止めに入った男性を男が振りほどく。そして——

食って掛かるような暴言とともに男性をつかみ、近くの家の扉に繰り返し打ち付ける。

外での騒ぎで不安に駆られた住民達は聞いた。鈍い音。

そして——頭から血を流して倒れている男性の姿があった。

やがて緊急自動車のサイレンが聞こえてきた。パトカーと救急車。

異変を感じた周辺住民が通報したようだ。

そして倒れているのは——自分の両親を助けようとした若い男性だった。

頭から血を流していた。

男は自らの行為が招いた結果に呆然としていた。

夫婦は恐怖のあまり、言葉も出ない——

私は二十六歳の女性。

私の彼氏が——死んだ。

それも、殺されたといってもいいような死に方だった。

二十九歳でその生涯を閉じることとなった。

彼は普段、両親と離れて暮らしていた。

両親が住む実家には定期的に帰っていた。

その実家の場所というのが——あの男が事件を起こした現場近くだった。

やがて事件の概要が明らかになった。

男は五十二歳。彼の両親の自宅からある程度離れたところに住んでいた。

あの男は所用で遠出をしていた。そこで寄った先でたまたまいた彼の両親と会っただけで、彼の両親との面識は無かった。

そこでトラブルになったと男は言った。だが実際はどうみても言いがかりに等しい理由で彼の両親を責め立ててきたのであった。

その場は何とかやり過ごしたが、男が彼の両親の後をつけていたらしく、自宅まで押しかけたのだという。

何度も押しかけるように彼の両親の自宅を訪ね、執拗に責任を認めろと迫っていた。

そんなある日。

たまたまその場に居合わせた彼は、何とか両親を助けようとした。

しかし、男の予期せぬ狂気じみた行動の犠牲になってしまった——

それから、である。

不可解といってもよい出来事がいろんなところで起きていたことを知ったのは。

彼を殺した男について彼の両親は何度も最寄の警察に相談していた。

しかし……

ある程度のことがないと警察は動きようが無い、と言われたという。

何かあったら連絡を、とは言ったらしい。だが両親にしてみれば形式だけのセリフにしか思えなかったと語っている。

何度も言いがかりに基づく責任追及じみたことをしたのだからそれだけでも捜査できなかったのか。男の両親は報道機関にこのような疑問を語っている。

そして私も——同じような疑問を感じていた。

後で報道で広く知られるようになったが、逮捕された男は、近所では何かあるとすぐに揉め事を起こすことで有名だったという。

さらに近所の人たちも地元の警察に相談することが何度もあったという。

ただ、そのときの警察の反応も——彼の両親が相談したところと似たような対応しかされなかったという。

そして近所の人たちは口々にこう語った。いつか誰かが……と。

その「誰か」に、彼がなってしまうのだ。それも、最

悪な被害を受けた――

これらのことが広く報じられるようになった後、それぞ  
れの関係する警察署では次のようなコメントを出した。

相談があった時点では切迫しているわけではないと判断  
した。ここまでの大きな被害は予想外だった、と――

また、対応に問題が無かったか検証する、とも言った。

私にはしらじらしいシナリオにしか聞こえなかった。

問題を認めたくはないが、その場で対応に問題が無かつ  
たと言ってしまうとマズイことになる。だから体裁を保つ  
ようとしている。

そうとは思えなかった。

実際あの男は彼の両親に不当な要求を執拗に行っていた  
し、男の近所の住民にも同様のことをしていたようだった。

彼がああ男の手にかかる前に、それなりの罪に問うこと  
はできたであろうに――

さらに私に追い撃ちをかける出来事が起きた。

検察が事件を起訴することになるのだが……あの男が殺  
人罪には問われないことになった。

男は彼をつかんで近くの家の塀に繰り返し打ち付けたこ  
とは認めた。

ただ、こうも供述しているという。

ついカッとなって痛めつけてやろうと思ひ、体を打ち付  
けたことは認める。ただ、頭がぶつかったのは予想外だつ

た、と。

そのうえ男は、攻撃回数はそんなに多くなかったとも主  
張した。

結局、検察は殺人罪ではなく、それよりは軽い罪とされ  
る傷害致死罪での起訴となった。

これには彼の両親も納得していなかった。

検察の説明によるといろいろ判断した結果、殺人での起  
訴は困難と思われることからこのような結論になった。

遺族の方々にとっては不本意かも知れないが、ご理解を  
――力の無い声でこのように説明したという。

……理屈ではわかっている。警察にせよ検察にせよ、そ  
して裁判所にせよ、どんな輩であろうと各々の役目として  
適切な範囲でしか行動を起こせないことは……

しかしそれでも私はおだやかではいられない。

散々多くの人々に膨大な恐怖を与え、それでもうまくい  
かないと暴力行為に及んだ。そして、私の彼を――

あの男に、ふさわしい代償を払わせたい。そんな考えが  
日に日に強くなっていく。

やがて男の初公判が始まった。そのときのこと報道さ  
れる。

報道によると、彼の両親は被害者参加制度を利用し、意  
見を述べた。可能な限り厳罰を、と。

被告となった男は、自らの過ちを認め深く反省している、  
と、力が無いような声で語ったという。

だが私は、それをどこまで信じていいのかわからない。と言うより、信じる気になれない。

長きにわたって人々に恐怖を与えるほどの言動を取った者が、簡単に自分の態度を間違いだと思えるものだろうか。刑を軽くするために言っただけかもしれないし、あるいは、弁護士が——言葉は悪いが「入れ知恵」をした可能性もある。

おとなしくしていた方が無難、なんて言ったりしたのかもしれない。

まあ、弁護士は職業柄、弁護をする側が有利になるように動かざるを得ないと思うが。

あれからどれくらいの時が流れたであろうか。

最初は抽象的だった私のその考えは、次第に具体性を増していった。

その考えが実行されたからといって殺された彼が戻ってくるわけではない。

しかし、である。

「殺された上、犯人が軽い処罰で済まされた」と、「殺されてしまったがせめて犯人は厳罰になった」とでは印象が違ふという人も多いと考えられる。

私はそう考えているし、私以外についても少なくとも彼の両親はそう考えているとやってよいだろう。

事実、彼の両親は殺人よりは軽いとされた傷害致死とし

て扱われたことについて、絶望といってもいいくらいの子だった。

この事件は裁判員制度の対象となり、裁判員も彼の両親の心情を相当考えてくれたのであろう。求刑はそれなりに重いものとなった。

ただ、法律の範囲内での処罰となる。この点については仕方が無いところ、と割り切るしかない……。

その日は一審の判決の日。その朝、私は覚悟を決めていた。

どうせあの男のこれまでやらかした言動に相応する罰は期待できそうに無い。

ならばいつそ……と考えたのである。

私が……「インディスタインクト<sup>プラスキュー</sup>+Q」になって、あの男を……

私が行動を起こせば、人々からそう呼ばれるかもしれない。

その言葉についてだが……

インディスタインクト (indistinct)、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

+Qについては、クエスチョン (question) から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれるといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディスタイン

クト+Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

作業員という表現が適切かどうかかわからない形式で、かつ作業員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の作業員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディスタインクト+Qと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

——私が起こそうとしている行動については、人々に十分インパクトを与えるであろう。

この日までに私が取った行動。

今回の標的は——言うまでも無くあの男。私はそのための作業員になる。

しかし問題は、どうやってあの男を「倒す」か、である。

チャンスは護送されて裁判所に到着したときだと思うが、周りは警察などで固めているだろう。

この日に備えて密売で購入した拳銃を用意。これ自体にもお金がかかったが、モノがモノだけに仕方が無いと思い、妥協した。

とはいえ警備体制からすると拳銃だけでは不十分である。

もちろん標的を仕留め損なうことも懸念されるが、標的以外を巻き込まない方法についても考えなくてはならない。それに——

一台の車が道路上を走っている。

見た目はどこにでもありそうなワゴン車だが、どこか違って見える。

屋根には赤い回転灯。中には——あの男が身柄の自由を制限された状態で乗っている。

緊張した面持ちの警察官が同乗している。

男の表情は険しいものとなっている。それは裁判によって決められる、今後の自分の運命についてなのか。それとも——今まで自分が取ってきた悪しき言動についての後悔なのか——

やがて護送車が裁判所に着く。

男が数人の警察官に動きを抑えられた状態で降りようとしていた。

そのときだった。

一台の乗用車がサイレンを鳴らし、護送車へと近付く。

赤い回転灯を付けた姿から、周囲の人々はパトカーを連想した。

クラクションを何度も鳴らし、周囲の人々に道を開けるよう促す。

「何かあったのか？」

護送車に乗っていた警察官の一人が驚きながら声を掛ける。

次の瞬間だった。消火器が周囲に向けて発射されたのは。あたり一面、特有の白煙が舞い上がる。

それと同時に乗用車から一人の人物が飛び出してきた。顔には防毒マスクをしている。

防毒マスクをしたその人物は、騒然となっている周囲の人々の間をぬうように男を探す。

その人物が——私だった。

——急いで始末しなくては！

私はあの男に対してどうやって決着を付けるのか、事前の方法を考えていた。

ある程度具体的にイメージこそしていたが、実際にはイメージ通りにならないものである。

薬剤による煙らしきものはそんなに長くは持たない。

ふと、あるところに目をやる。

——いた！

あの男だ！身体が拘束されている！今だ！！

私は持っていた拳銃を男の頭に向けて至近距離から数発発射した。

そして私は——命中だけ確認すると急いでその場を離れた。

周囲を威嚇するため空に向けて何発か発砲。

自分の車に戻り、急いでその場を離れる。

警察官が車に駆け寄る。あと少し遅かったら運転席までたどり着かれるところだった。

覆面パトカーの真似事をするための機器は運転席から手の届く位置にあったので、すかさず手に取り車内に入れた。

その場はしのげた。だが、こんなことをやってしまった以上、そう遠くには逃げられないだろう。

私は逃走しながらわずかであろう残された時間で、たつた今自分が実行に移した作戦について思いをめぐらせた。

「インディステインクト+Q」と呼ばれた者は自らの作戦実行にあたってインターネット上で犯行声明を出すことも多い。

記事の投稿時間をうまく調整し、多くの人々の目に触れるとき、既に作戦は実行に移され、作戦に関わったものは死亡している、なんてことも。

手軽な手段ということなのだろう。私もその方法を用いた。自らをインディステインクト+Qと称して。

そして私は犯行声明を出す際、あることについても触れたかった。

今回の件で私は犯人だけではなく警察の対応についても疑問が湧いていた。そして——

さすがに警察関係者を死傷させるのはやりすぎだが、せめて「メッセージ」を警察に受け止めてもらおうと考えた。

だからできれば、こんなことをやってみたかった。警察

が何もしないならせめて自分に必要な武器や車両くらいは提供してもらおう、というメッセージとして。

目的は個々の事件によって違うだろうが、過去には警察官の銃器を奪ったケースもあったようだ。もちろん日本で起きた事件である。

しかし自分がやった場合、警察官ともみ合いになりその場で捕まってしまうか、その場は逃げるのができて後日捕まる可能性が高いと考え、実行に移すのはやめておいた。

無理に奪おうとして過剰攻撃になることも避けたかった。

結局、密売の方がまだマシと考えた。

次にパトカーの方が……

入手してから作戦終了までうまく逃げきれるとは到底思えず、強奪は空想するだけにとどめておいた。

回転灯は市販されている円筒状の物でマグネットで着脱できるものを使った。

サイレンも市販品を利用した。ほんの少し手を加えて、作戦実行直前に屋根に取り付けられるようにしたのである。

いずれにせよ、警察から必要なものを奪ったわけではないので正しくは、警察が何もしないならせめて自分に武器などの必要なものを提供してほしかったというメッセージ、となるのだろう。

メッセージにしては滑稽な行動が多すぎた。滑稽すぎて自分自身が作業員と呼ばれるに値するのかアヤシイ面も多

々あったが、何はともあれあの男の抹殺は成し遂げられたと思う。

頭にあれだけの銃弾を浴びたのだから――

助手席には拳銃が置いてある。さっきあの男を射殺するために使ったもの。

さすがにいつまでも逃げ切れるわけではない。警察はこの辺を警戒しているであろう。

私の予感に迎合するかのように後ろからサイレンが聞こえてきた。

だが私は、生きて捕まるつもりは無い。

きりのいいところであっさりと幕引きを図るつもりだった。

しかし――

マズイことにパトカーが何台もこちらに近付いている。今走っている道路は片側二車線。方向区分は車線表示のみ。仕切りのための設備があるわけではない。

幕引きをするにせよ、スピードが出てる状態で自分を銃殺すれば無関係の周囲の人たちを巻き込んでしまう。

かといって下手に停止させてしまうと生きたまま捕らえられてしまう。

前を見ると一般車両がゆつくりとした速度で走っている。前方の信号は赤だった。

私は反対車線にはみ出した。クラクションを鳴らしなが



ら。

周囲の人たちにはうるさく感じたのかもしれない。もっとも、その原因については後ろのサイレンや赤い回転灯、それも私が作ったニセモノではなく、明らかに「本物」のパトカーを見ればわかるだろうな。

私は赤信号を強引に侵入。周囲の車は異変を感じ取ったのだろう、青信号で侵入しようとしていた車両も動きを止める。

交差点を強引に抜けきった。前方には車がない。

その頃ラジオでは、私が撃ったあの男の死亡が確認されたことが臨時ニュースとして流れていた。

これでもう、思い残すことは無い。あとはどうやって自分自身の後始末をするのか、それさえ考えればよい。

やがて左手側に道路標識用の柱が見える。立っている場所も都合がいい。

ここに狙いを定めて――

程なくして私の車から一発の銃声が聞こえた。

後ろから付いてきているパトカーの警察官達に緊張が走る。

――犯人が発砲してきた！

その後、私の車は標識にぶつかる。

それからだった。私の車を取り囲むように何台ものパトカーがやってきたのは。

警察官が拳銃を構えながら慎重に近づく。私の反撃を警戒しているのだろう。

防弾仕様と思われる盾で自分の身を守りつつ、少しずつ近づく。

遠くから双眼鏡で私を見る者もいる。

「犯人は倒れているようだ！頭から血を流している」

無線で他の警察官に連絡を入れている。

やがて、私の身柄は確保された。但し、死体という形で。標識にぶつかる寸前、私は自分の頭を銃で撃っていた。

運転できなくなった私の車を、標識は見事に止めてくれた。それに関する衝撃を感じたことは覚えている。

ただ、その後の一連の警察関係者の行動について、私はどこまで覚えていたのだろうか。

薄れゆく意識の中で――

(終)

著者 庫発りべるぎ

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一四年十月二十六日

(C) Kohatsu Riberuki